

徳島方言におけるノナ文と分離 CP 仮説 —— 英語と標準語との比較を通して ——

富山 晴仁

“No na” Contructions in Tokushima Dialect and the Split CP Hypothesis
—— In Comparison with English and Standard Japanese ——

Haruhito TOMIYAMA

1. はじめに

藤原 (1982 : 184) が指摘しているように、徳島方言は文末詞「ナ」の使用がさかんである。例えば(1)のような疑問文がその一つである。

(1) 誰が行くんな？

以下では(1)のような徳島方言の疑問文のことを「ノナ文」と呼ぶことにする。^{1), 2)}また、特に断りが無い限り「ナ」はノナ文で使用されている文末詞「ナ」のことを指すことにする。³⁾

本研究ノートの目的は、次の2点である。⁴⁾

- ①ノナ文の統語的特徴を明らかにする。
- ② Rizzi (1997) の分離 CP 仮説の枠組みで、「ナ」の現れる位置を明らかにする。

2. ノナ文と疑問詞

2.1. ノナ文

ノナ文の統語的振る舞いを分析する前に、その使用実態について少しだけ触れておく。金沢 (1961 : 160) は、「ナ」のことを「県下全般に、最も普通に行われている、一番親しい間柄のことばである」と述べている。加藤 (1966) によると徳島県だけでなく、徳島県と隣接する高知県安芸群東洋町甲浦にまで使用範囲が及んでいる。^{5), 6)}さらに、本稿執筆時点で、商品のパッケージやライン・スタンプなどの媒

体でもノナ文を目にすることができるほど、ノナ文は徳島県で生活の中に溶け込んでいる。⁷⁾

「一番親しい間柄のことば」の部分には解釈に注意が必要である。「親しい」と言っても、子供が親に対してノナ文を使用して発言することはない。また、女性が使用することもほとんどない。使用実態に照らし合わせると、この箇所は「主に男性が、丁寧な表現を必要としない間柄の者や目下の者に対して使用することば」と解釈すべきであろう。

2.2. 疑問詞疑問文としてのノナ文

「ナ」は一般的に「尋問法」(金沢1961 : 160) 等と分類されているが、実際は疑問詞疑問文でしか使うことができない。「ナ」と疑問詞との関係について明示的に記述している文献としては加藤 (1966) がある。ここで加藤 (1966 : 42) は「前に疑問詞が来る場合に、その疑問文を完結させる働きが見られる」と記している。厳密に言うとこれは高知県甲浦のノナ文に対する説明であるが、徳島方言のノナ文にも当てはまると考えてよい(注5を参照されたい)。よって、(2)のような肯否疑問文でノナ文は使用することができない。⁸⁾

(2) (*) 太郎が行くんな？

(2)を提示すると、ほとんど全員の徳島方言話者は非文だと判断するが、(2)を肯否疑問文として使用できると見なす者もいる。しかし、仮に(2)が非文ではないとしても、実際には疑問文として機能していな

い点に注意しなくてはならない。実際(2)の文は、肯否の返答ではなく確認を求めている文としてなら非文ではない。つまり、「太郎が行くんだな」に見られる確認要求の「ナ」が(2)に現れていると分析することが可能なのである。

この点をさらに明確にするために、確認要求の解釈ができない例文で考える。(3)は巨人対阪神の試合を見ていない人物が、どちらのチームが勝ったかを尋ねるためにおこなった発言である。文中の「テ」は疑問文を作ることができる、徳島方言で多用される文末詞である。空の文末詞を含めていずれの文末詞も自然な肯否疑問文を作り出す。

- (3) 巨人が勝ったん {で／か／φ} ? ほれとも阪神が勝ったん {で／か／φ} ?

次に、(3)の文末詞を「ナ」に変えて(4)にする。興味深いことに(2)を肯否疑問文として使用できると見なした者も(4)は不自然であると判断した。

- (4) *巨人が勝ったんな? ほれとも阪神が勝ったんな?

(4)の「ナ」を確認要求の「ナ」と解釈することはできない。なぜなら、確認要求の文として解釈すると、巨人の勝利を確認すると同時に、阪神の勝利も確認するという矛盾した行為をおこなっていることになるからである(標準語: *「巨人が勝ったんだな? それとも阪神が勝ったんだな?」)。また仮に「ナ」が肯否疑問文でも使用できるのであれば、(3)と(4)は同等の容認度がなくてはならないはずである。(4)を自然な文として容認できないのは、ノナ文が肯否疑問文では使用できないことを示している。(2)を容認できると判断した話者は、確認要求の文として(2)を解釈していたのである。

(2)(4)と(1)との違いは、疑問詞の有無に他ならない。以上を踏まえてノナ文の「ナ」の認可条件として(5)を提案する。

- (5) 「ナ」は疑問詞と統語的に関連付けられなくて

はならない。

2.3. 「ナ」と疑問詞の局所性

「ナ」の出現は、疑問詞の存在に依存していることを確認した。本節ではこの依存関係の局所性について考察を行う。

生成文法の枠組みにおいて、疑問詞が従わなくてはならない統語上の制約は、主として英語の疑問詞疑問文の研究によって明らかにされてきた。英語の疑問詞疑問文では、疑問詞の移動に伴い、それにより疑問詞のスコープの範囲が決定される。その移動は所謂「島」を超えるものであってはならない。(6)ではそれぞれ角括弧で示した複合名詞句の島、付加詞の島、whの島からwhatの取り出しが起き、不自然な文になっている。⁹⁾

- (6) a. *What did Mary meet [the person that gave _ to John]?
b. *What did May leave [after John bought _]
c. *What does John wants to know [if Mary ate _] ?

島の制約にノナ文が従うかどうかを見ていく前に、島を形成していない従属節に疑問詞が埋め込まれた場合を確認しておく。

- (7) 警察は [太郎が何をしたって] 言よんな?

(7)は非文ではない。また、徳島方言話者に(7)に対する可能な返答を作るよう求めたところ「窃盗」等の回答を得た。つまり、「何」は「ナ」が付加している主節にまでスコープが及んでいるのである。

複合名詞句の島と付加詞の島に関して、ノナ文が島の制約に従うかを見る。次の(8)はそれぞれ、疑問詞を複合名詞句と付加詞に埋め込んだノナ文であるが、両者とも容認可能である。さらに疑問詞のスコープが主節にまで及んでいる解釈がなされる。

- (8) a. 警察は[太郎に何をあげた人]に会うたんな?
b. 警察は [太郎が何を買った後で] 出動した

んな？

範疇である。

次に wh の島について考察する。(9)がその例である。

(9) 警察は「太郎が何をしたか」知っとんな？

徳島方言話者に、この文に対する可能な返答を作るよう求めたところ、「そうだ」といった肯否の返答ができるという者と、「文自体がおかしい」という者の二つのグループに分かれた。両者に共通しているのは、従属節の疑問詞が主節までスコープを広げた解釈ができないという点である。

(9)の従属節には疑問の終助詞「カ」があり、いわゆる wh の島を形成している。従って「何」と「ナ」を結びつけて解釈しようとするとき wh の島の制約に違反してしまう。これは「文自体がおかしい」としたインフォーマントの判断と合致する。一方、wh の島が介在することにより、疑問詞のスコープを従属節の内側に留めた場合、「ナ」は(5)に違反してしまう。しかし、疑問文を作る「ナ」とは解釈できないものの、確認要求の「ナ」としてならば解釈できる。これは(9)に対する可能な返答として「そうだ」と答えたインフォーマントの判断と合致する(例文(2)に関する議論も参照されたい)。

以上、ノナ文は、wh の島の制約に従うことを確認した。これは、疑問詞と「ナ」が局所的な関係になくなくてはならないことを示している。

3. ノナ文と分離 CP 仮説

3.1. 英語と日本語における FocP

本節では「ナ」の統語構造上の位置を考察していく。分析するにあたり、文端の統語構造に関して、Rizzi(1997)の分離 CP 仮説を採用する。Rizzi(1997)は、従来の CP を機能範疇の階層であるとし、(10)のような構造を仮定している。ForceP は「発話力」を担い、文の種類を決定する。TopP は「話題」、FocP は「焦点」の機能範疇で、それぞれ話題化や焦点化の際に働く。FinP は文の「定形性」に関する機能

(10) [ForceP [TopP [FocP [TopP [FinP ...

これまでの議論の中で、ノナ文には疑問詞が必要であり、さらに「ナ」と疑問詞は局所的な関係になくなくてはならないことを見た。これを踏まえ、まずは疑問詞の位置に関して分離 CP の構造を見ていくことにする。この機能範疇の階層の中で、疑問詞は FocP に現れると考えられる。そもそも、疑問文においては疑問詞が焦点になることから、疑問詞疑問文に FocP が関与していると考えるのは妥当なことである。統語的にも、Rizzi(2001:290)によって、疑問詞が FocP に現れることが示されている。(11)のイタリア語の両文は、疑問詞の *a chi* と焦点化された *QUESTO* が前置されており、非文となっている。Rizzi(2001)の説明では、イタリア語の前置される疑問詞の移動先が FocP の指定部であるので、焦点化される要素と競合し、それ故に共起できないということになる。

- (11) a. *A chi QUESTO hanno detto (non qualcos'altro) ?
 to whom THIS have said(not something else)
 'To whom THIS they said (not something else) ?'
 b. *QUESTO a chi hanno detto (non qualcos'altro) ?
 THIS to whom have said (not something else)
 'THIS to whom they said (not something else) ?'

英語の文にも同様のことが当てはまる。英語では否定の要素を焦点化し文頭へ移動することが可能である(その際、主語と助動詞の倒置を伴う)。(12)において、焦点化した *no other colleague* が文の先頭に移動している。

(12) No other colleague would he turn to.

しかし、この焦点化による移動は、疑問詞疑問文では不可能である。(13)では、疑問詞の *what* と焦点化した *never again* の両方が文頭へ移動しており、非文となっている。

(13) *What never again will you do?
(Radford (2009 : 284))

(13)が非文になるのは、英語でもイタリア語と同じく疑問詞と焦点化された語句が、(14)のように FocP の指定部を競合するからであると考えれば説明できる。この説明の前提として、英語において FocP の指定部は一つしか使用できないと考えなくてはならないが、これは英語で複数の疑問詞を前置することが不可能であることにより裏付けられる (“*Who what ate?”)¹⁰⁾

(14) *...[FocP never again [Foc] ...what...
 ↑ _____ |

分離 CP 仮説の構造を日本語に当てはめるとどのようになるか。主要部後置である日本語では、分離した CP 内に現れる様々な機能範疇が文末にくることになる。文末に特徴的な統語構造を持つ構文として、(15)のようなノダ文を挙げることができる。

(15) 僕が行く {の／ん} だ

分離 CP 構造を採用した Hiraiwa and Ishihara (2003) や桑原 (2010) によると、ノダ文の準体助動詞の「ノ」は FinP の主要部に、断定の助動詞の「ダ」は FocP の主要部に現れるとされる。この考えに従って、ノダ文の中心部分を図示すると(16)になる。詳しくは Hiraiwa and Ishihara (2003), 桑原 (2010) を参照されたい。¹¹⁾本稿では(16)の構造を正しいものだとし、以降の分析において採用する。

(16) [FocCP [TopP [FocP [TopP [FinP [IP [VP...]]]]]] [ん]] [だ]]

3.2. 断定の助動詞としての「ナ」

ここで、徳島方言の「ナ」に戻って考察を進める。この「ナ」は、疑問詞への依存性を除くと統語的に断定の助動詞と類似している点が多く確認できる。以下では、標準語の助動詞「ダ」と、徳島方言の助動詞「ジャ」(例「わしが行くんじゃ」)を、「ナ」と比較し、その類似性を指摘する。¹²⁾

先ず、「ダ」も「ジャ」も、「ノ」もしくはその異形態の「ン」を前に挿入しなければならないが、「ナ」の前にも「ン」の挿入が義務的である。

- (17) a. 誰が行く* ({の／ん}) だ?
 b. 誰が行く* (ん) じゃ?
 c. 誰が行く* (ん) な?

(2)(4)でみた「ナ」の例と同様、助動詞「ダ」「ジャ」も肯否疑問文で使用することができない。

- (18) a. *お前が行くんだ? (肯否疑問文として)
 b. *お前が行くんじゃ? (肯否疑問文として)

ノナ文ではないので傍証になるが、「ナ」も助動詞「ダ」「ジャ」も、疑問詞に直接付加して使用することが可能である。¹³⁾

- (19) a. あいつは誰だ? / これは何だ?
 b. あいつは誰じゃ? / これは何じゃ?
 c. あいつは誰な? / これは何な?

以上、「ナ」は、助動詞「ダ」「ジャ」と同じ統語的振る舞いを示すことを見た。さらに注目すべきことに、「ナ」は助動詞「ジャ」と共起することができない。¹⁴⁾

- (20) a. 誰が行くん (*じゃ) な?
 b. 誰が行くん (*じゃ) ?

(17)–(19)に見られる「ナ」と断定の助動詞との類似性と、(20)に見られる相補分布は、「ナ」を断定の助動詞の一種であると見なすことで説明できる。¹⁵⁾

ここで(21)を仮定する。

(21) 徳島方言の「ナ」は断定の助動詞の一つである。

3.3. 分離 CP 仮説における「ナ」

ここで、分離 CP 仮説におけるノナ文の構造を考える。(21)に基づいて、「ナ」は、助動詞「ダ」と同じく FocP の主要部に現れると仮定する。

「ナ」が出現するには、疑問詞の存在が必要である。第3.1節で見たように、イタリア語や英語の疑問詞は FocP の指定部に現れると考えられている。ここで、ノナ文においても疑問詞が FocP の指定部に現れると考える。これが正しいとすると、「誰が行くん」は次のような構造をとることになる。

(22) [_{ForceP} [_{TopP} [_{FocP} 誰が_S [_{TopP} [_{FinP} [_{IP} [_{VP} 行] く] ん]] な]]]

(22)の構造において、「誰が」と「ナ」は指定部 - 主要部の関係で結ばれており、両者が局所的な位置関係になければならないとする条件を満たしている。肯否疑問文のように疑問詞が存在しない場合には、「ナ」は認可されず非文となる。(9)のように疑問詞が wh の島に埋め込まれている場合には、島の制約に違反することなく FocP の指定部へ移動することができないので、その疑問詞は主節のスコープを持つことができなくなる。

ところで日本語は疑問詞の移動が義務的でない、wh-in-situ の言語である。例として、従属節に疑問詞が現れる(7)を(23)として再掲する。

(23) 警察は [太郎が何をしたって] 言よんな?

この問題に関しては、Watanabe (1992) の空の演算子の移動を採用する。(24)は、空の演算子 Op が「何」から主節の FocP 指定部にまで上昇し、「ナ」と指定部 - 主要部の関係を作っていることを示している。

(24) [_{ForceP} [_{TopP} 警察は [_{FocP} Opi [_{TopP} [太郎が何 i をしたって] …] な]]]

3.4. 「ジャ」の連体形としての「ナ」

助動詞「ダ」が FocP の主要部に現れるとすると、徳島方言の助動詞「ジャ」も FocP の主要部に現れると考えるのが妥当である。特に、両者の類似性に関しては第3.2節で見たところである。ところで、宮城 (1956: 45) には助動詞「ジャ」の活用表が記載されているが、その中で「ジャ」の連体形は「ナ」となっている。宮城 (1956) は、助動詞「ジャ」の連体形の「ナ」とノナ文の「ナ」とを関連させて論じていないが、本稿で採用した統語構造に即して考えると、両者とも FocP の主要部という同一の機能範疇に出現することになる。

ここで、助動詞「ジャ」が疑問詞により連体形の「ナ」に変化している可能性が出てくる。¹⁶⁾(25)は「ジャ」が FocP の主要部に生成されると仮定した場合の「わしが行くんじゃ」の統語構造である。

(25) [_{ForceP} [_{TopP} [_{FocP} [_{TopP} [_{FinP} [_{IP} わしが_S [_{VP} 行] く] ん]] じゃ (終止形)]]]

「誰が行くんじゃ」では、IP 指定部内の主語が疑問詞に変わり、FocP の指定部へ移動することになる。

(26) [_{ForceP} [_{TopP} [_{FocP} 誰が_S [_{TopP} [_{FinP} [_{IP} t [_{VP} 行] く] ん]] じゃ (終止形)]]]

仮に、FocP 指定部に現れた疑問詞が、「ジャ」を選択的に連体形に変化させることができるとすると、(27)の構造になる。

(27) [_{ForceP} [_{TopP} [_{FocP} 誰が_S [_{TopP} [_{FinP} [_{IP} t [_{VP} 行] く] ん]] な (連体形)]]]

以上の議論が正しければ、ノナ文は、世界の言語で観察されている CP 内での指定部 - 主要部の一致現象の一つとして見なすことができる。(28)は Rizzi

(1990: 55) からの現代アイルランド語の例で、演算子との指定部 - 主要部の一致により、CP内の補文標識が通常の *go* から *aL* に変化している。

- (28) An rud aL shil me aL duirt tu aL dheanfa t
(The thing that thought I that said you that you
-would-do)

古い日本語で、疑問詞（疑問の副詞や、係助詞がついた疑問詞）によって連体形への変化が引き起こされていたことを考えると、「ジャ」が疑問詞により連体形に変化することもあり得ないことではないが、本稿では可能性の一つとして留めておくことにする。^{17), 18)}

4. まとめ

第1節で示した、本研究ノートの目的を再掲する。

- ① ノナ文の統語的特徴を明らかにする。
- ② Rizzi (1997) の分離 CP 仮説の枠組みで、「ナ」の現れる位置を明らかにする。

①に関しては、先ずノナ文が疑問詞疑問文でなくてはならないことを示した。また、疑問詞と「ナ」との間には *wh* の島が介在してはならないことを示した。

②に関しては、疑問詞が *FocP* の指定部に現れるとする Rizzi (2001) の分析及び、断定の助動詞「ダ」「ジャ」と「ナ」との統語的類似性により、「ナ」の位置を *FocP* とすることが妥当であることを見た。また、これにより①の統語的特徴も説明できることを見た。

さらに、ノナ文を CP 内での一致現象として分析できる可能性も示した。

参考文献

- 加藤信昭 (1966) 「高知県安芸郡東洋町甲浦方言の語法」『徳島大学学芸紀要』15, 25-48, 徳島大学
- 金沢治 (1961) 『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図書館
- 金沢治 (1976) 『改訂 阿波言葉の辞典』小山助学館
- 楽原和生 (2010) 「日本語疑問文における補文標識の選択と CP 領域の構造」長谷川信子 (編) 『統語論の発展開と日本語研究』開拓社
- 富山晴仁 (2015) 「徳島方言の文末詞『だ』の位置と機能について」『日本言語学会第151回大会予稿集』122-127, 日本言語学会
- 藤原与一 (1982) 『昭和日本語方言の総合的研究第3巻 方言文末詞<文末助詞>の研究 (上)』春陽堂書店。
- 宮城文雄 (1956) 「徳島方言概観」『徳島大学学芸紀要人文科学』5, 39-56, 徳島大学
- 三宅知宏 (2015) 「対照方言研究の試み～不定語疑問文をめぐって～」『鶴見大学紀要, 第1部, 日本語・日本文学編』52, 1-28, 鶴見大学
- 山口華奈 (2013) 「和歌山市方言における疑問詞疑問文の文末詞『ナ』」『阪大社会言語学研究ノート』11, 57-65, 大阪大学
- Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara (2003) "Missing Links: Clefts, Sluicing, and "No da" Constructions in Japanese," *The Proceedings of HUMIT 2001, MIT Working Papers in Linguistics* 43, ed. by Tania Ionin, Heejeong Ko and Andrew Nevins, 35-54, MIT.
- Radford, Andrew (2009) *An Introduction to English Sentence Structure*, Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. By Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer.
- Rizzi, Luigi (2001) "On the Position "Int (errogative)" in the Left Periphery of the Clause," *Current Studies in Italian Syntax: Essays Offered to Lorenzo Renzi*, ed. by Guglielmo Cinque and Giampaolo Salvi, 287-296, Elsevier.
- Watanabe, Akira (1992) "Wh-in-situ, Subjacency, and Chain Formation," *MIT Occasional Papers in Linguistics* 2, MIT.

注

- 1) 「ナ」の前には準体助詞と考えられる「ン」の挿入が必要である (第3.2節参照)。「ンナ文」と呼ぶ方が実態に即しているのだが、撥音で始まる表現を避けるため、「ノダ文」に倣い「ノナ文」と呼ぶことにする。

- 2) 後に詳述するように、ノナ文は疑問詞疑問文のみでしか使用することができない。
- 3) 金沢 (1976: 174–175) が疑問の文末助詞として挙げている、「ホンマナ」「オマホンモナ」の「ナ」は、ノナ文に現れていないことに加えて、疑問文ではなく確認要求の表現である可能性があることより、本稿では議論の対象から除外する。これらの使用実態や統語構造についての考察は別の機会に譲る。
- 4) ①②に向けての分析の中で、英語及び標準語との比較を行うが、これは岡山方言の疑問視疑問文における仮定形変化を論じた三宅(2015)に倣ったものである。
- 5) 加藤 (1966: 45) は、「何をしているのだ」が、「土佐弁」の使用される須崎市では「ナニオシュー」になるのに対し、甲浦(白浜)では「ナニオシヨノンナ」になることを示している。藤原 (1982: 187) の「四国全般の状況としては、高知県下に、『ナ』の比較的よわいのが注目される」との指摘からも、甲浦のノナ文が高知では稀なものであり、徳島方言の影響を受けたものであることが推察される。
- 6) 紀伊水道をはさんだ対岸の和歌山県和歌山市でも、疑問詞疑問文で使用される文末詞「ナ」が存在する(山口 (2013))。徳島方言の「ナ」との関係についての考察は別の機会に譲る。
- 7) 商品のパッケージに関しては株式会社さわの「阿波づくし弁当」の包み紙に印刷されている「阿波弁夫婦喧嘩講座」の中に「何言よんなだ」が見られる(「ナ」に後接している「ダ」については、注14を参照されたい)。ライン・スタンプに関してはM9M9氏の「徳島の父さん」(<http://www.line-tatsujin.com/detail/a110074.html>)の中に「いつ帰るんな」が見られる(最終アクセス: 2016年9月21日)
- 8) 金沢 (1961: 160) が挙げている「モウナンジナ」(もう何時だ)「ナンシヨンナ」(何をしているんだ)等の例文全てに疑問詞が現れている(標準語訳は筆者による)。
- 9) 複合名詞句、付加詞、whの島に疑問詞が埋め込まれた標準語の例は、それぞれ以下ようになる。ノナ文と同じく、whの島に埋め込まれた疑問詞は、主節のスコープを持ってなくなる(肯否疑問文として解釈する場合は、自然な文となる)。
- (i) メアリーは[ジョンに何をあげた人]に会ったの?
(ii) メアリーは[ジョンが何を買った後で]出かけたの?
(iii) (?) ジョンは[メアリーが何を食べたかどうか]知りたがっているの?
- 10) (i) のように感嘆文のwh句(*how many of their policies*)の場合は、ForcePの指定部に移動するので、焦点化要素(*only rarely*)は共起することが可能である。
- (i) How many of their policies only rarely do politicians get around to implementing!

(Radford (2009: 283))

また、(ii) のように話題化された語句 (*that kind of behavior*) の場合は、TopPの指定部に移動するので、疑問詞と共起することができる。

(ii) That kind of behavior, how can we tolerate in a civilized society?

(Radford (2009: 284))

- 11) 後述の議論が正しければ、ノナ文はノダ文の一つということになる。
- 12) 「ジャ」は主に男性が使用し、女性の場合は「ジャ」の代わりに「ジョ」を使用する(例「私が行くんじょ」)。ノナ文が主に男性の使用する表現であることから、「ジョ」ではなく「ジャ」との比較を行っていく。
- 13) 宮城 (1956: 46) が挙げている (i) の文は、この形式に該当すると思われる(標準語訳は筆者による)。
- (i) その石鹸なんぼうナ? (その石鹸いくらだ?)
藤原 (1982: 184) が徳島方言の文末詞「ナ」の例として、金沢 (1976) から引用している (ii) も、この形式に該当すると思われる。なお、引用元の金沢 (1976: 181) では、(ii) を「ナンナ」の項目の中で取り上げている(標準語訳は筆者による)。
- (ii) アレ位ナンナ (あれ位何だ)
- 14) 「ダ」は「ナ」に後接することができる。注7で見た「何言よんなだ」がその例である。しかしこれは、「ノ」と隣接しなければならぬノダ文の「ダ」ではなく、徳島方言に存在する文末詞「ダ」である。徳島方言の「ダ」は統語構造上、動詞句から遠い範疇に生成されると考えられる(富山 (2015))。(iab) では、「ダ」が終助詞の後方に、(ib) では、助動詞「ジャ」の後方に現れている。
- (i) a. わしが行くんよだ
b. わしが行くんじゃわだ。
- 15) 「ナ」は終助詞と共起することができない。(ia) は終助詞が「ナ」の前に現れた場合で、(ib) は後ろに現れた場合である。(ia) が示す終助詞の分布は助動詞「ダ」の場合と同じであるが、(ib) に関しては、助動詞「ダ」と異なる振る舞いを示すことになる。この差の説明については今後の課題としたい。
- (i) a. 誰が行くん |*よ/*ね| な
b. 誰が行くん な |*よ/*ね|
- 16) 注13で述べたように、両者は主に男性が使用する点においても共通している。ちなみに女性が使用する「ジョ」は興味深いことに、肯否疑問文だけでなく疑問詞疑問文にも使用することができない。
- (i) a. *おまはんが行くんじょ?
b. *誰が行くんじょ?
- 17) 現代の日本語の動詞では、終止形が連体形に吸収されているので、疑問詞によって変化が起きているかどうかを形態の面で確認することが難しくなっている。
- 18) 岡山方言では、疑問詞による仮定形への変化が、助

動詞だけでなく動詞にも見られる(三宅(2015))。(i) (i) どころが静かなら
は助動詞「ダ」が変化した例で, (ii) は「行く」が (ii) どけー行きゃー
変化した例である。